

亀様と海

中島 ブフ

鈴鹿の山の奥の奥、深い森に囲まれた小さな池がありました。

この池には、万年も生きていたという亀が住んでいました。

この亀は、気が遠くなるほど長く生きていますから、知らないことは何ひとつありませんでした。

ですから、森の生き物はみな『亀様』と呼んで、まるで神様のように尊敬していました。

ある日、若い鹿が池に近づいて来て、亀様に聞きました。

「わたしは通りかかりのものですが、とても喉がかわいています。この池の水は、たいそう清らかで澄んでいます。少しいただいてもよいでしょうか」

「この池の水は、鈴鹿の山に降った雨が何年もかかって湧き出したものじゃ。これほど清らかな水はほかにはない。遠慮なく飲むといい。しかし、おまえはここらでは見かけない顔じゃが、どこに行くんじゃ」

「わたしは、これからこの山を越えて、東の果てまでまいります。そこで海に出て、塩水で足の傷を治すのです」

「なんと、この山に果てなどあるものか。この山は、果てしなく続いているのじゃからな。それに『海』とはなんじゃ。塩水とは、どういうことじゃ。わたしは知らん。それはどんなものじゃ」

「これはこれは、なんでもご存知とっておりました。海というのは、この池のようでもあります、とてつもなく広いもので、太陽も平らな海の果てから昇ります。海の水はとても塩辛いのです」

「なんと！ 太陽は山から昇るのに決まっておるし、水が塩辛い？ この目で見ない限りは信じられん。わたしを海まで連れて行ってくれ」

知らないものはない、と信じていた亀様は、どうしても海を見たいと思いました。

「残念ですがわたしは急いでいます。とてもあなた様とご一緒はできません。かわりにこの鈴を差し上げます。この鈴はわたしの鈴と共鳴しています。ですから、どんなに遠く離れていても、必ずわたしの鈴の音が聞こえます。その音を頼りに東に進んでください」

そういうと、鈴をひとつ亀様に渡して、鹿は走り去りました。

翌日、亀様は始めてこの森を出て、東へと歩み始めました。

途中、道が分からなくなったときは、鈴に耳を傾けました。

それから何年かたったのでしょうか、やっと大きな峠にさしかかりました。

そのときでした。

開けた山の間にはるか遠く、真っ平らな空の底から、赤く輝く朝日が昇ってきました。

「ああ、あそこが山の果てか、あれが海というものか。なんと大きく、なんと美しいことか。まだまだ、まだまだじゃったな……」

そういうと、亀様は満足して目を閉じ、永い眠りにつきました。